

氏名

なかむら

いさむ

講師



主な研究テーマ

□ 武道の国際普及に関する研究、武道の礼法がどのように変化してきたかに関する研究

平成25年度の研究内容とその成果

伝統を大切にする武道は、その技や作法が長い間変わらずに伝わってきたと思われがちですが、実はそうではありません。むしろ頻繁に変更を加えて現在に至っていると言った方が正しいと思います。

国際競技として確立している柔道は、ルール改定のせいで、組み方や技などが大幅に変わることはよく知られていますが、実は昔のままで変わるはずがないと思われがちの礼法も、昔は今と違った形式で行われていたことがわかっています。今は座って行う「坐礼」は正坐の状態を実施しますが、江戸時代に発展し柔道の元になった柔術では片膝ついただけであったり、相撲の「そんきょ」姿勢から少し頭を下げるだけだったりいくつかのスタイルがあります。また正坐の場合も現在のように爪先を寝かせて足の甲を下に向けるのではなく、両爪先を立てたまま（両膝と足指だけが畳に触れている状態）が主流でした。古い武術書の挿絵や現存する古武道流派の演武をみることでどういう坐礼をとっているかわかるのですが、今の正坐の坐り方は畳が一般的

に普及した江戸中期以前は行われていなかったと考えられます。

明治の時代になって嘉納治五郎という若き教育者が自らが学んだ柔術を元に講道館柔道を作り上げたわけですが、その当初は「爪立ち」での坐礼を行っていました。これは嘉納が学んだ二つの流派がそうだったからだと思うのですが、これがいつの間にか現在の正坐スタイルに変わったようです。昭和6年の講道館教本の写真ではこれが確認できるので少なくともこの年までには変わったことは間違いありません。

私はこれ以前の柔道の指導書を片っ端から調べてみているのですが、具体的な変更時期はまだ特定できていません。その理由として明治時代の指導書は投げ技などの技術解説中心で、礼法についての記述はほとんどないからです。そもそも礼法は日常生活で当たり前に行うものでわざわざ指導書で説明するまでもなかったからでしょうか。昭和初期の嘉納自身による形演武のビデオ映像がありますが、礼法だけでなく形動作そのものも厳密な動作が決まっているようではなく幹の部分が守られていれば枝

葉はあまりこだわらない、という雰囲気があります。おそらく当時の礼法は、旧武家の作法であったり、出自の流派伝来の作法(初期の柔道家には柔術経験者も多い)であったり、とにかくきちんと礼をしていればよかったのかもしれません。柔道に限らず明治の武道はそんな感じだったのではないのでしょうか。

それがきちんとした礼の型を定め、みなが同じ動作を行うようにするのは、柔道が剣道とともに学校体育の必修授業として取り入れられた1931(昭和6)年ころからだと考えられます。マンツーマンや小グループで学ぶ道場稽古と違って授業は規律正しい集団行動が求められるため礼法動作の細かいところまではっきりと決められたのでしょう。

H25年度は昭和初期が柔道礼法の発展にとって重要な時期だということが見えてきました。「礼に始まり礼に終わる」といわれる武道ですが、実は礼法と武道の蜜月関係は実は昭和以降の話なのかもしれません。

これからの研究の展望

実は戦前の柔道研究開発は嘉納が興した講道館の系統だけでなく、大日本武徳会という組織でも研究開発しています。武徳会は京都に武徳殿という武道場を建て、武道振興と学校教育採用のために柔道と剣道だけでなく武道全般の研究、指導者養成、競技会開催などを行いました。

柔道礼法の形式は、実は講道館と武徳会

では少し違いがみられるようです。H26年度は明治から昭和戦前における両者の違いについてもう少し細かく見ていきたいと考えています。